

2011教育研究覚え書き

—東日本大震災に対してできたこと—

橋 本 賢 二

2011年3月11日

2011年は日本にとって大きな出来事があった年である。3月11日14時46分に起きた地震と直後の津波、さらにそれに続いた東京電力福島第一原子力発電所の大惨事は、結果的にわれわれ世代が生まれてから、日本にとって最も大きな国家的規模の危機的状況を生み出してしまった。原子力発電所で水素爆発が連鎖的に発生し、日本中がパニックに陥った直後には、日本に在住する外国人の多くが、本国政府の指示に従い国外に退去した。外資系企業に勤める日本人の役員たちは「京都から西へ移動するように」というかけ声に従い、家族ともども東京をあとにした。

その頃、偶然にも私は大阪のとある有名ホテルのバーにいた。バーのナイトラウンジには、有名外資系企業の役員とおぼしき男性がいて、グラスを傾けながら延々と携帯電話で話し続けていた。

「フランス大使館の指示で今、家族といっしょに大阪のホテルに避難してきているんですよ…」

彼は、家族共々大阪まで「避難」してきていて、その現状と居場所を多くの関係者に知らせるべく、大声で次々と電話をかけていたのだ。

1995年阪神大震災があったとき、ある有名人が偶然神戸にいて、震災直後に無事大惨事を生きのびて帰京してきたというエピソードが、テレビで誇らしげに流されていた。そのとき再現ビデオでは「九死に一生、神戸を脱出」と紹介されていた。

「脱出」という言葉には微妙なニュアンスが垣間見える。「神戸人が元町から脱出に成功」とか「福島県民が東北を無事脱出」とは使わないであろう。関西の周辺部に住んでいた私は、その当時、被災者がもし「疎開」してきたら温かく受け入れてあげたいと思っていたのだが、被災者が近くに移り住んできたという話は聞かずじまいであった。移住により国家を形成したアメリカ人の場合には、生

涯にわたり転々と引越しを繰り返しながら、人生の段階に合わせた暮らしを演出していくことも多いが、歴史が長く、家族制度が確立している日本人の場合、多くは生まれ育った場所に縛られ、ほとんどの人がどんな大きな出来事があるとしてもその地から離れることがなく、その場所に愛着を持ち続けるものである。そして、その人たちは退去の必要性が生じたときには、未練のない「脱出」ではなく、愛する場所に惜別の思いをこめて「一時避難」とその行動を呼ぶことだろう。

そんな体験があったために、私は被災地から関西に移り住む人の数は決して多くはないだろうと思っていた。ましてや今回は、関東、東北から箱根の山を越え「異国」に移るわけである。ところが、大阪府は今回の東日本大震災で被災された人々のなかで、透析が必要な患者を100人以上も受け入れられる場所を、莫大な予算をかけて急速準備した。しかしその施設は数家族により一時利用されただけで、ほぼ無駄な形の支援に終わり、結局すぐに閉所されてしまった。人は経験から学ばねばならない。前回の地震で学んだこと以上に人々の土地に対する「地縛」は強く、その被災の範囲は広く、大きかったのかもしれない。しかしこの教訓は必ず、今後に活かされなければならない。文化研究をするとき、その分野で学ぶことがこのような実地的な事例のなかで実は大きく機能するものであるということ、研究者、教育者、学生ならびにその経歴を積んだ社会人、行政担当者も、今一度しっかりと肝に銘じておかなければならない。

FLYJINと無口な政治家

放射能汚染が主たる問題となっていくにつれて国外に退去していく外国人の数は増し、機上の人となった彼らを指して「フライジン」という英語が生まれ、ながびく電力カット、節電要請により、日本の経済活動にも大きな翳りが生まれた。この先電力料金の高騰により、産業の空洞化はさらに加速していくのだろうか？

選挙により当選するための努力が最大の仕事になっている現在の政治家たちの中で、この現状に対する説明を国外に対して行った人物を知らない。かつては少なくとも「鍋のフタ」くらいの威厳と権限があった大臣の存在感も、時代と共に「鍋のフタのつまみ」くらいに小さくなり、政治が完全に官僚たちの手にゆだねられた21世紀平成の時代にあっては、「鍋のフタのつまみに貼られたシール」程度にまで成り果ててしまった。「政治家たちのための政治」が当たり前になり、首相が半年で持ち回りになる国で、この災害に際して国外から受けた支援に対して国家的道義を

感じ、いち早く謝意を表明した政治家は何人いるのだろうか。そんな義憤を持った文化人の名前もすぐに浮かんでこない。

国際関係において、日本に欠けている最も大きな要素のひとつは、やはり世界に対しすぐさま英語で日本人の心情を語ってくれる著名人の存在ではないだろうか。インターネットや携帯電話がないゆるやかな時代には「無口な日本人」でも許されていたかもしれないが、これからは国際性を持った政治家が必要である。アメリカからの外圧がない最後の分野「政治と行政」では、完全に変革が半世紀遅れたままである。世界的に発言力のある人は政治家や文化人でなくてもよい。セレブ（Celebrities）やソーシャライト（Socialites）のような人々でもよい。そういった本当に国際的な日本人が世界の舞台に登場する時代はいつごろ来るのだろうか。

海外からの支援とマスメディア

この国難に際し、多くの国々から援助の手を差し伸べていただいた。

これまで世界5位の援助国であった日本は、この震災により世界各地から約864億円相当の物資や資金の援助を受け、一気に世界第1位の「被援助国」となってしまった。1993年から2000年まで日本のODA（政府開発援助）の拠出額は、世界第1位だった。この支援の裏には、発展途上国では使いきれない高度な機械やプラントを輸出支援し、結局日本の企業がまたそこから利益を得るという図式があったことも事実だが、それにしても大きな金額であり偉大な経歴である。これらの活動のお返しとして、ボツワナ、トルコ、モルディブ、北朝鮮など決して豊かとはいえない国々からも多くの支援を受けたそうだが、なかなか日本国内でそれらの情報が広く知られることはなかった。「ペンは剣よりも強し」という言葉は情報化時代の今日においてさらに大きな意味を持っている。ここ数代の首相の首をすげ替えているきっかけの多くは、間違いなくテレビ、新聞、雑誌等マスコミの報道である。叩けばほこりの出ない体はない。世論が総理に対し「賞味期限切れ」のサインを示したなら、すぐさま隠れていたスキャンダルが表に出てくる。巨大なメディアツールを擁するマスコミの自負心は時に暴走し、政局を動かす。しかしほんとうの国民の利益がそこから生まれ出ているとは信じがたい。大きな政変やスクープではなく、ささやかで埋もれがちな情報に目を配り、反応がないようなニュースを送り出すことにも、大きな使命はあるはずである。

英語を教える立場での行動

政治家やマスコミばかりを非難していても始まらない。すべての人々が自分の守備範囲の中で、この出来事と事態に対し、何らかの活動、行動を実践に移すことが、後悔のない時間の過ごし方になるのではないかと考えた。

今の時代なら You Tube 等の動画投稿サイトを活用することも大きな手段となるだろう。しかしながら、それらには大きなメリットと共に大きな危険も潜んでいる。またそれらの動画を作成し、投稿するにはそれなりの技術も必要であるために、今回はそこまでの展開は控えて、学内における活動として何ができるかを考えてみた。

震災支援に対するお礼を英語で表そう

震災の余韻さめやらぬ、2011年度前期、欧米言語文化コースの専門科目「米文学研究」において、緊急にこの活動を取り上げた。あれだけの支援を世界各地から受けながら日本政府が世界の新聞に謝辞を掲げたというニュースはほとんど耳にしなかった。また動画投稿サイト You Tube には、スポーツなどで日本が勝利した場合には、見事に編集され、すばらしい音楽と共に、人を惹きつけるコメントがつけられた動画がすぐにアップされるものだが、今回に限っては、公式、非公式なものを合わせても、なかなかそれらしきものを見かけることはなかった。そこにはやはり、英語で自分たちの率直な気持ちをうまく表現し、それを口にして伝えるだけの「なじみ」がなかったのかもしれない。それならば、英語を専門にするわれわれが何らかの活動の一步を記すことも無駄ではないのではと考え、とりあえず、本学に来ている外国からの留学生などを対象に、我々が日本人の現在の心情を代表し、お礼を伝えることにした。（またいずれこの文面が大学のリポジトリを通じてインターネットで公開されるなら、時期は過ぎてしまっているかもしれないが、より多くの人々に見てもらえることになるだろう。）

まず、学生たちに「自らの今の気持ちを日本語で書いてくる」ように伝え、集まった文章を点検しつつ、一人一箇所、採用する語句を選択した。自分の言葉が取り上げられるのとそうでないのでは、【興味とやる気】という点において大きな違いがある。

さらに、それらを集めてひとつの文章にし、みんなで声に出して読み上げ、全員で討論しつつ、添削作業を行った。

完成した日本語案はそのまま、A4一枚の紙に収まるようにした。それが次の①である。

ありがとう、日本は大丈夫です

2011年3月11日に起きた東日本大震災により、日本は非常に大きな打撃を受けました。地震発生直後には、世界各地から多くの救助隊の方々がすぐさま駆けつけてくれました。またその後、多くの国や地域から、支援物資や人的救助、並びにたくさんの募金をいただきました。日本よりも経済的に苦しい国の人々から送られてきた尊い義援金や支援の品々には、日本のだれもが心を打たれました。

震災直後には国全体が暗い雰囲気になりましたが、日本は皆様からいただいた尊い支援を励みに、不屈の精神力により立ち上がり、復興への道のりを歩み始め、その足取りを着実なものにしています。

これからも、世界の各地で様々な苦難があることでしょう。しかしその時も、この出来事を忘れず、国境を越えて、お互いに支えあっていければいいと思います。

まずは身近な人々として、海外から大阪教育大学に来ている多くの方々に、それらの支援に対する感謝の気持ちを伝えたく思います。ありがとうございました。

(大阪教育大学 米文学研究室)

さらに、それらを元にして、英語版を作成することにした。こちらの方が主として重要度は高いのだが、なかなか骨の折れる仕事になった。まず、勉強の一環として、その日本語版を英語にするという作業を学生たちにさせてみた。参考となるような見本の英文はインターネットで探して提供しておいた。さらに、英語に訳すときに便利な辞書のサイトとして「アルクの英辞郎」などを指示した。しかしながら、なかなか難しかったようで結局、教師本人が大幅に手を入れることになった。

日本語的な表現に拘泥^{こうでい}すると英文がおかしくなり、英文ばかりを見ていると日本語のニュアンスがかなり失われていく。二律背反の苦渋のなか、「英語らしい英語」より「日本語らしい英語」でもかまわないというスタンスを選び、決定的に間違っていなければ OK という方針とした。

書き上げた英文は同僚のブラウン先生に確認していただいたところ、幸いほとんど修正もなく無事完成となった。それが次の英語版②である。

The Sun Also Rises in Japan with Your Help

Japan was heavily damaged by the Great East Japan Earthquake and Tsunami, which occurred on March 11, 2011. Immediately after the disaster struck, a lot of rescue teams came to Japan from many countries and regions and many lives were saved. Then Japan received a lot of cheer, relief supplies and huge donations from all over the world. We all Japanese have been deeply touched by these warm offers. We would like to express gratitude for this continuing support from the bottom of our heart.

After the devastating earthquake, the fatal tsunami and the subsequent nuclear disaster, there prevailed a melancholic atmosphere in Japan. Days of gloom and doom followed for a while. However, Japan has already started to get back the peaceful life here again. Japanese have risen up together for reconstruction, looking to the east where the tsunami came and the sun rises, as well.

Remember the Tsunami. Never forget the friendship. We have found how deeply Japan is loved by the people all around the world. In return, we have to express heartfelt gratitude to the people. Unknown hardships may be waiting everywhere in the world. Without such a close relationship, the world will not be able to face the ordeals. This is our lesson.

Thank you very much for your assistance.

Faculty of American Literature

The Department of European and American Languages and Cultures

今日、世界の標準語は英語になっているが、必ずしもすべての人が英語を理解できるわけではない。世界はまだまだワールドワイドである。そのことをもう一度、学生たちと認識新たにするためにも、さらにできる限り多くの言語で「ありがとう」Thank you を書いてみようという提案をした。そして作り上げたのが、次の③ ④である。

Thank you for your support and encouragement to Japan



日本語 Japanese	ありがとう	アリガトウ arigato
中国語 Chinese	谢谢	シエシエ xièxie
韓国語 Korean	감사 합니다	カムサハムニダ kamsahamnida
タイ語 Thai	ขอบคุณ	コーブン khopkhun
ラオス語 Lao	ຂອບໃຈ	コープジャイ hkohp jay
ベトナム語 Vietnamese	Cám ơn	カムーン kahm uhn
インドネシア Indonesian	Terima kasih	トゥリマカシーterima kasih
モンゴル語 Mongolian	Баярлалаа	バイラルラー bayarlaa
ヘブライ語 Hebrew	תודה	トーダ toda
アラビア語 Arabic	شكرا	シュ克蘭 shukran
ペルシア語 Persian	ممنون خیلی	ヘイリイ・マムヌン kheili mamnun
グルジア語 Georgian	დიდი მადლობა	ディディ・マドロバ didi madloba
トルコ語 Turkish	teşekkür ederim	テシェキュレデリム teshekurederim
アルメニア語 Armenian	շնորհակալություն	シュノラカルチューン shnorhakalutyun
ロシア語 Russian	Спасибо	スパシーバ spasiba
ギリシャ語 Greek	ευχαριστώ	エフハリスト efharisto
ブルガリア Bulgarian	благодаря	ブラゴダリヤ blagodarya

Thank you for your support and encouragement to Japan



イタリア語 Italian	Grazie	グラツィエ grazie
フランス語 French	Merci	メルシーmerci
スペイン語 Spanish	Gracias	グラスィアス gracias
カタロニア語 Catalan	Gràcies	グラスィエス gracias
ドイツ語 German	Danke	ダンケ danke
オランダ語 Dutch	Dank u	Dank・ユーdank u
ルクセンブルク語 Luxembourgian	Merci	メルシーmerci
チェコ語 Czech	Děkuji	ジェクイ jekuji
ラトビア語 Latvian	Paldies	パルディエス Paldies
ポルトガル Portuguese	Obrigado	オブリガード obrigado
スウェーデン語 Swedish	Tack	タック tack
フィンランド語 Finnish	Kiitos	キーツ kiitos
スワヒリ語 Swahili	Asante	アサンテ asante
マオリ語 Maori	Kia ora	キア・オラ kia ora

この文書は美しくカラーで仕上げられているが、編集は個人研究費で印刷会社のアイジイに依頼した。アイジイには編集に加え、厚紙への印刷、アクリル製のサインボードへの加工もお願いした。①日本語版と英語版を表裏にモノクロ印刷し、ありがとうの③と④をカラー印刷した。厚紙に仕上げたもの、アクリルボードに仕上げたもの、薄手の紙に仕上げたもの三種類のバージョンが完成した。アクリルボードは全10台、これだけでもかなりの金額になる。すべてを完成して、データを付けてもらった。予定外の活動で、予期せぬ出費はかさんだが、出来上がるとうれいものである。

結局これらは完成が遅れ、原発不安も癒えかけ、やや震災の記憶が薄れ始めた学期末に届いたため、それらを持って大学内の各部局を回るのは7月末の最後の日になった。

「どこに置けばよいか、どのように掲示してもらえば効果的か」学生たち自らにも考えさせ、意見を集約した。

結局、廊下を踏み出したとたんに出会った「国際センター」の先生に事情を説明して、留学生がいちばん集まる場所に置かせていただいたのをスタートに、生協、教務課や研究教育の支援係や学長室へも持参した。

その後のことは夏休みに入りあまり詳細にはわからないが、とにかくひとつの目的を立てて、滑り込みではあったが半期ですべてそれらを成し遂げられたことは事実である。その苦しみと喜びを学生たちに味わってもらえたことが、いちばんの成果だったのではないだろうか。「思っても行動に移すことがむづかしい時代のなかで、ささやかなことであっても、何かを思い立ち、それを実行実現することには、きっとそれ以上の意味があるのではないか。」その原動力からきっと何かは生まれたはずである。一連の作業から生まれたものの効果は不明だが、それをやり遂げたことから、何かはきっと生まれたと信じた。